結び目の壊し方

【登場人物表】

東城サツキ（17）（18）　女子高生
桐島流星（28）（17）　理科教師
水無月美奈子（17）　サツキの同級生
遠野深也（28）　桐島の高校の同級生
新月香織（28）　桐島の高校の同級生
一ノ瀬梓（28）（17）　桐島の元恋人
東城紀美佳（44）　サツキの母
清原誠子（52）　国語教師
校長
店長
女子生徒1
女子生徒2
店員

○桜ヶ丘女子学園・校庭（夜）

夜空に星が輝いている。

地面に寝転んでいる東城サツキ（１７）。

腕を空に伸ばし、指で星と星を線で結ぶようにしてなぞる。

無気力に腕を下ろし、ゆっくり目を閉じる。

○東城家・サツキの部屋

カーテンのわずかな隙間から朝陽が差している。

鏡の前に制服姿のサツキ。

制服のリボンに手をかけ、鏡の中の自分を見つめる。

サツキ「……はぁ」

大きなため息をついてリボンを解く。

○桜ヶ丘女子学園・外観

煉瓦造りの学校。

青々と茂った木々。蝉がうるさい。

生徒たちが登校。

清原誠子（52）が校門前に立ち、生徒たちに挨拶をしている。

清原「あ、こら、ちょっとあなた、スカートの丈が短いんじゃないかしら」

女子生徒1「え、そうですか？でもこの方が可愛いじゃないですか」

女子生徒2「今はこのくらいの丈がトレンドなんですよ、先生」

清原「女性として、正しくふさわしい着こなしをすることが重要です」

不満を漏らす女子生徒たち。

その後ろをスタスタ歩いて行くサツキ。

清原「ちょっと待ちなさい」

制服のリボンをしていないサツキ。

清原、怪訝な顔をし、

清原「……あなたのその格好もトレンドなのかしら」

サツキ「……どうですかねー？」

○同・職員室

教員たちがそれぞれのデスクで作業をしたり、雑談をしている。

教科書や資料をまとめている桐島流星（２８）。

イライラしながら入ってくる清原。

清原「もうっ！　まったく！　あの子、なんなのかしら！」

清原、勢いよく椅子に座る。

清原「桐島先生！」

桐島「はい」

清原「ほんっとう、なんですか！　あの子は！」

桐島「東城さん……ですか？」

清原「うちは歴史ある女子校なんですよ！　代々受け継がれてきた制服はリボンも含めて美しい女性らしさを引き立たせます。うちの制服にどれだけの女子が憧れたことか……それをあの子は」

桐島「まあまあ、清原先生……」

清原、桐島を睨み付ける。

清原「桐島先生、あなたもからもきちんと指導してくだいよ！」

桐島は苦笑いで応える。

○同・2年3組教室

サツキ、窓枠に頬杖をついて、向かいの職員室の様子を眺めている。

○同・廊下

桐島、たくさんの資料を抱え歩いている。

サツキ「せーんせ。また清原先生に怒られてたでしょ」

からかうように桐島の肩に肘を置く。

桐島「東城さんのせいですよ」

サツキ「えー？　なんのこと？」

桐島「君はまた……そうやって」

わざとらしく知らん顔するサツキ。

呆れる桐島。

サツキ、思わず笑って、

サツキ「ごめんて。先生の反応が可愛くてつい」

大きなため息をつく桐島。

桐島「先週の化学の課題、提出していないの東城さんだけになりましたよ」

そこへ後ろから声をかけられる。

美奈子「サツキー！」

水無月美奈子（17）が手を振る。

サツキ「今度！　明日！　いや、今日出す！ごめんね！」

サツキ、桐島から逃げるように美奈子のもとへ行く。

笑い合うサツキと美奈子。

美奈子、サツキの手を引いて廊下を駆けていく。

桐島、その後ろ姿を見てため息をつく。

○コンビニ・レジ前〜外

レジにスイーツを置いて会計をする美奈子。

サツキ「あれ？美奈子、いつもの可愛いネックレスどうしたの？」

美奈子「ああ、捨てたの」

サツキ「え、なんで？　彼氏からもらったやつでしょ」

美奈子「別れたから」

サツキ「え？　また？　もったいな」

会計を終える。

美奈子、歩きながらすぐにスイーツの蓋を開け、食べ始める。

美奈子「いいの！　私はこうやってサツキと美味しいもの食べてる時が一番幸せなの」

サツキに腕を絡める美奈子。

美奈子「サツキー、私別れたばっかだからさ。慰めてよー」

サツキ「駅前の限定パフェ？」

美奈子「さすが！」

サツキ「はいはい。まったく、美奈子はわがままですねー」

はしゃぐ美奈子。

○桜ヶ丘女子学園・理科準備室

資料をデスクに置き、椅子に座る桐島。

引き出しから手紙を出して読む。

桐島、物憂げな表情。

○同・2年3組教室

授業を受けている生徒たち。

サツキ、団扇で扇ぎながらボーッと聞いている。

机の中には解答欄が全て埋まっている化学のプリント。

○同・理科準備室前・廊下（夕）

プリントを持って歩くサツキ。

窓ガラスにうっすら映る自分を見て髪を整える。

○同・理科準備室（夕）

サツキ、ノックもせずに入室。

サツキ「先生お待たせー……」

デスクで寝ている桐島。

桐島の顔をそっと覗き込んで思わず笑うサツキ。

ふと、デスクにある手紙に気が付く。

そーっと手にとって読んでみる。

うっすら目を開ける桐島。

桐島「あずさ……？」

サツキ「……え？」

桐島、ハッと目を覚ましてサツキを見つめる。

サツキが手紙を持っていることに気づき、慌てて取り上げる。

サツキ、驚きながらも、

サツキ「あずさって、その人？」

桐島「君には関係ありません」

サツキ「それ、ラブレターだよね」

桐島「もう下校の時間ですよ。早く帰ってください」

無理やり部屋からサツキを追い出そう

とする桐島。

サツキ「ちょ、ちょっと！」

桐島「女性なんですから、暗くならないうちに、ほら」

サツキ「は？　あ、なに？　もしかして元カノ？」

からかうようにサツキが聞くと、

桐島「……だったらなんですか。大人をからかうのも大概にしなさい」

サツキ「へー……どんな人だったの？」

桐島「もう忘れました」

サツキ「なんでまだそれ持ってるの」

桐島「知りません」

サツキ「嘘だね！」

桐島、振り向く。

サツキ「昔の恋人の物を捨てられないのは、またどこかで会えるかもって期待してるからだよ。再会した時にその時の思い出とつなぎ合わせて……0からじゃなくて3とか4からやり直したいって思ってる

……って、美奈子が言ってた……」

桐島「……ゴミの分別に悩んでいるだけです」

サツキ、まっすぐに桐島を見つめる。

桐島、その押しに負けて、

桐島「……もう10年以上も前の話です。彼女が今どこにいるのかも分かりません。だから」

サツキ「なら……探そうよ。その、梓さんって人」

桐島「……はい？」

サツキ「夏休み終わるまでに見つからなかったら、それ……捨てようよ」

じっと見つめ合う二人。

○カフェ・店内

女性客が多くにぎわっている。

サツキ、男性のように脚を開いて座っている。

その向かいに美奈子が綺麗に足を揃えて座る。

美奈子「本当、素直じゃないね、サツキは」

サツキ「うるさい」

美奈子「そのラブレター奪い取って破いてやるくらいしてあげればよかったじゃん」

サツキ「無理だよ。……めちゃくちゃ字綺麗だったもん」

美奈子「なにそれ」

店員「お待たせしました。スペシャルピーチもふもふパフェです」

美奈子「きゃー！　かわいい！」

目の前に大きなパフェが置かれる。

はしゃいでパフェを食べる美奈子。

浮かない顔のままのサツキ。

サツキ、パフェをぐちゃぐちゃと混ぜている。

美奈子「落ち込むくらいなら言わなきゃよかったのに。その人と先生が再会したら一番困るのサツキじゃない」

サツキ「まあ……そうだけど」

サツキ、再びスプーンでパフェの中身

を混ぜている。

美奈子「食べないならもらっちゃうよ！」

美奈子、スプーンを持つサツキの手を取る。

そのまま自分に「あーん」をさせるように食べる。

サツキ「ちょっと！」

笑い合う二人。

サツキ、同じスプーンでパフェを食べ始める。

○桜ヶ丘女子学園・体育館

全校生徒が校長の話を聞いている。

校長「夏休みは勉強ももちろんですが、様々な経験をすることも重要で……」

大きなあくびをするサツキ。

首元のリボンを邪魔そうに引っ張って苦い顔。

教員が並んでいる方を見る。

満足そうな表情の清原と目が合う。

サツキ、清原の隣にいる桐島の横顔に視線を移す。

○同・外観

セミの声がうるさい。

校庭では野球部が練習をしている。

○同・廊下

遠くから吹奏楽の演奏が聞こえている。

生徒や教師達の姿は見えない。

○同・外階段

桐島、踊り場の陰に隠れてタバコを吸っている。

階段下には「禁煙」と書かれた看板。

桐島、タバコを地面に捨て、靴で潰す。

その場を立ち去ろうとすると、階段下のサツキと目が合う。

桐島「あ……」

サツキ、いたずらな笑顔を浮かべる。

○同・職員室前廊下

桐島、大量の資料を抱えて歩く。

その後ろをニヤニヤしながらサツキがついていく。

桐島「なんですか。もう夏休みですよ」

サツキ「先生は夏休みも仕事ー？」

桐島「邪魔しにきたんですか」

サツキ「約束したじゃん。夏休みの間に先生の元カノ……」

桐島「余計なお世話です」

サツキ「じゃあこれ、捨てちゃうよ？」

桐島、サツキから例の手紙を奪い取る。

サツキ「……冗談だよ。先生慌てすぎ」

桐島、ため息をつく。

サツキ「そんなに大事……？」

桐島「東城さんには関係ありませんよ」

桐島、スタスタと歩いていく。

サツキ「タバコのこと、清原先生が知ったらなんて言うかなー」

桐島、立ち止まって、

桐島「……好きな食べ物は？」

サツキ「え？」

桐島「好きな食べ物は？」

にやけるサツキ。

○同・理科準備室

フラスコやビーカーなどを丁寧に磨いている桐島。

その様子をプリンを食べながら見ているサツキ。

サツキ「食べ物入れるわけじゃないんだからそんなに綺麗にしなくてもよくない？」

桐島「実験は料理と同じです。器が綺麗だと、料理もおいしく見えるでしょう？」

サツキ「薬品は美味しく見えちゃダメでしょ」

桐島「道具が汚いと実験結果が変わることもあるんですよ」

サツキ「先生って付き合ったら彼女にもそんな感じなの？」

桐島「知りません」

サツキ「えー教えてよー」

桐島「知りません」

サツキ「じゃあ、先生。私と付き合ってよ」

桐島「また、何言ってるんですか……」

鼻で笑いながら振り向くと、サツキが真剣な眼差しで見つめている。

サツキ「冗談だよ」

○居酒屋・店内（夜）

サラリーマンやOLで賑わっている。

厨房カウンター前に立つサツキ。

店長「東城、これとこれ5番テーブルね」

サツキ「……」

料理の皿の縁についたソースの汚れをじっと見つめる。

その汚れを指で拭き取り、運んでいく。

サツキ「お待たせしましたー」

テーブルには桐島と遠野深也（28）。

桐島「あ……」

サツキ「あ……」

遠野「え？」

遠野、慌てた様子で、

遠野「なに？　もしかして……彼女！？」

サツキ「彼女……」

桐島「違うよ。教え子」

サツキ「教え子……」

遠野「なーんだよ。あ、飲み物の注文いい？」

サツキ「はい、どうぞ」

遠野「俺ビール。桐島は？」

桐島「とりあえずビールで」

遠野「ビール２つね！　あ、君も何か飲む？　奢るよ！」

サツキ「じゃあ、私もとりあえずビール！」

桐島「オレンジジュースで」

桐島、サツキを睨み付ける。

サツキ、いたずらに笑いながら厨房カウンターへと去る。

遠野「それにしても高校卒業ぶり？　相変わらずクールだな」

桐島「遠野も相変わらず声でかい」

遠野、ふざけて桐島の肩を小突く。

サツキ「おまちどーさま」

サツキ、ビールとオレンジジュースを持ってくる。

遠野「ねえ知ってる？　俺と桐島、高校の同級生でさ！　高校の時の桐島って、ザ・ガリ勉って感じで表情一つ変えねえの。鉄仮面」

サツキ「今と変わんないね」

桐島「遠野」

遠野「だろ？　でも、変わったよな。梓ちゃんと付き合ってから」

メニュー表を片付ける桐島の手がピタリと止まる。

遠野「何て言うか、人間らしくなったっていうか」

サツキ「ふーん……」

遠野「あ、梓ちゃんっていうのは」

桐島「遠野」

店長「東城！　ごめん、こっちお願い！」

店長に呼ばれるサツキ。

サツキ「はーい！　あ、遠野さん、これありがと」

サツキ、オレンジジュースを飲みながら店長のもとへ去っていく。

桐島「遠野ってさ、梓と同じ秋慶大だよな？　梓って今……」

遠野「あー……そういうこと？　悪い、俺知らねぇんだわ。大学入ってからなんか避けられちゃって」

桐島「そう……」

遠野「ほら、別れた後だったし俺にも気使ったんじゃない？　そういう子だったじゃん」

桐島「……」

桐島、ビールをグッと飲み干す。

○水無月家・外観（夜）

大きな2階建一軒家。広い庭がある。

○同・美奈子の部屋（夜）

ベッドでスマホを見ている。

スマホにはサツキにパフェを「あーん」してもらっている2ショット写真。

思わず笑みが溢れる美奈子。

○居酒屋前・道（夜）

桐島、遠野に肩を抱えられ、ぐったりしている。

その様子を見ているサツキ。

遠野、タクシーを止め、桐島を乗せる。

遠野、桐島に気づかれないようサツキに話しかける。

遠野「梓ちゃんのこと探してるんだって？やめておきな？」

サツキ「……なんで？　10年経って激変してるとか？」

遠野「じゃなくてさ。……会えても会えなくても苦しいだけでしょ。一回別れてんだか

らさ」

サツキ「……遠野さんもそういう人いるの？」

遠野「いるねー」

サツキ「会いたくない？」

遠野「超会いたい」

サツキ「めんどくさ」

遠野「大人ってそういうもんなの。サツキちゃんにはまだ早かったかな？」

サツキ「サツキちゃん……」

遠野、もう一台のタクシーを停めて、1万円をサツキに手渡す。

遠野「じゃあ、気をつけて帰りなよ」

○東城家・浴室（夜）

サツキ、ギュッと目を瞑る。

目を瞑ったまま服を脱ぎ、風呂に入る。

風呂から上がってスウェットに着替え終わると、ゆっくり目を開く。

○クレープ店・外観

行列に並んでいるサツキと美奈子。
美奈子、サツキに腕を絡めて密着している。
サツキ「美奈子、暑いよー」
美奈子「いいじゃない。嫌なの？」
サツキ「……もう、まったく。美奈子はわがままなんだから」
と、美奈子の頭を撫でる。
順番が来て、注文する二人。
美奈子、サツキにスマホの画面を見せて、
美奈子「ねえ、サツキ。ここのプールすっごく可愛くない？　今度行こうよ！」
サツキ「プールか……」
美奈子「あ……やっぱプールはなし！」
サツキ「え、なんで？」
美奈子「最近食べ過ぎでビキニとか恥ずかしいもん！　だからさ、お祭りにしよ！　あいうところに出てるりんご飴食べてみたい！」

サツキ「りんご飴……いいね！」

美奈子「やった！」

サツキ「でも、いいの？　最近食べ過ぎなんでしょ？」

美奈子「やめてよ、もー」

笑い合う二人。

サツキ「美奈子ってさ、夏休み中の学校って行ったことある？」

美奈子「んー？　中学の時は部活でよく行ってたかな。なんで？」

サツキ「校舎の中結構静かでさ。いいよ。ついでにオフモードの先生も見られるしね！」

無邪気に笑うサツキ。

サツキのスマホに通知。

サツキ「え！」

美奈子「なに？」

サツキ「先生から。期間限定のプリン買ってきてくれたんだって！」

美奈子「へー。よかったじゃん」

店員「お待たせしましたー」
店員がクレープ2つを差し出す。
サツキ「あ、でも……」
美奈子、2人分のクレープを受け取る。
いきなりサツキの頬にキスをする。
美奈子「これで許す」
サツキ「え？」
美奈子「夏休み中の学校、いいんでしょ？　ほら、行ってきな！」
サツキ、少し渋る。
が、美奈子が持っているクレープを大きな口で一口食べると、
サツキ「ごめん！　ありがとう！」
サツキ、その場を立ち去ってく。
かじられたクレープを見つめる美奈子。
サツキと同じ場所を大きな口でかじる。

○桜ヶ丘女子学園・理科準備室
窓を開け、タバコを吸い始める桐島。
プリンを片手に、酔った桐島の写真を

見て微笑むサツキ。

サツキ「先生ってやっぱ可愛いよね！」

桐島「それ、早く食べないと腐りますよ」

サツキ「そういう先生だから梓さんも好きになったのかな……」

写真を見つめ、寂しげなサツキの横顔を横目で見る桐島。

サツキ、プリンを食べながら大きく脚を広げていたことに気付き、慌てて閉じる。

セミがうるさく鳴いている。

桐島「あっつ……」

ネクタイを外す桐島。

桐島「東城さんも飲み物いりますか？」

サツキ「お願いします！」

飲み物を取りに奥の部屋へ行く桐島。

サツキ、置かれた桐島のネクタイを見つめて手に取る。

そのまま自分の首に巻いて結ぼうとするが上手くいかない。

桐島「こうやって結ぶんですよ」

桐島、サツキの背後から手を伸ばし、綺麗に結んでやる。

桐島「まあ、東城さんは覚える必要もないことですけど……」

サツキ、鏡の中の自分の姿に夢中になっている。

その様子を見つめる桐島。

そこへ、桐島のスマホの通知音が鳴る。

サツキ「ねぇ先生！　似合ってる？」

桐島、スマホに夢中になっている。

サツキ「ねー、先生。聞いてる？」

桐島のスマホに指をかけて画面を見ようとする。そのはずみでスマホが床に落ちる。

桐島「あ、ちょっと……！」

サツキ、スマホを拾い上げて画面を見ると、マッチングアプリのホーム画面。様々な女性のプロフィールが並んでいる。

サツキ、苦笑いしながら、

サツキ「あー……ダメだよ先生。こういうのはバレないようにしなきゃ」

桐島「誤解です。人探しです」

サツキ「え？　梓さん？」

桐島「梓はこんなものやりません。絶対に」

○繁華街（夜）

サツキ、ひとり歩いている。

前方に手を繋いだ男女カップル。

ショーウィンドウを見ながら話している。

サツキ、足を止め、ショーウィンドウ内のワンピースを着たマネキンを見つめる。

○百貨店・紳士服売り場（夜）

男性用のスーツやネクタイが並んでいる。

サツキ、店内を見回す。

色とりどりのネクタイの中から一つを手にとって、自分自身の首元にあて、鏡を見る。

店員「お父様へのプレゼントですか？」

サツキ「え……？　あ、あぁ……」

戸惑うサツキに笑顔で接客し続ける店員。

○水無月家・美奈子の部屋（夜）

美奈子のスマホへサツキからの電話。

美奈子「もしもし。サツキ？」

サツキ「美奈子、今日ごめんね」

美奈子「……あーあー。サツキのせいでまた太っちゃうなー」

サツキ、思わず笑顔になって

サツキ「たくさん食べられてラッキーだったんじゃない？」

美奈子「もう！　サツキと食べなきゃ意味ないの！」

サツキ「なにそれ」

笑い合う二人。

サツキ「美奈子ー」

美奈子「ん？」

サツキ「私、なんで女の子じゃないんだろうね……」

○東城家・サツキの部屋（夜）

サツキ、机の上のギフトラッピングされたネクタイを見つめる。

○水無月家・美奈子の部屋（夜）

美奈子、スマホの終話ボタンを押すと、画面はインスタに切り替わる。

「カップルで食べたいスイーツ」が特集されている。

スワイプしていくと、美奈子がカフェで食べたパフェやクレープの写真。

○カフェ・外観

テラス席のあるカフェ。ガラス張りで

店内が見える。

○同・店内

大半の席にカップルが座っている。

新月香織（２８）がスマホを気にしながら、カプチーノを飲んでいる。

手鏡を見ながらリップを直し、前髪を整えている。

その様子を離れた席から見ているサツキと美奈子。

美奈子「サツキ。パフェ来たよ」

サツキ「うん……あとで食べるから美奈子先に食べてていいよ」

香織のスマホの通知が鳴る。

「着きました」というメッセージ。

入り口に目を向ける香織。

桐島、店内に入ってくる。

桐島「新月さん、だよね？」

香織「え……なに、もしかして……桐島くん？……はあ、なにそれ笑える」

苦笑いする香織。

桐島「新月さんって、梓とまだ連絡とってる？」

香織「……は？　それ知ってどうするつもり？」

桐島「いや……その……」

香織「やめてくんない？　自分から逃げておいて、今更どんな顔して会うつもり？」

食い入るように様子を見ているサツキ。

香織、イラついた様子で店を出ていく。

サツキ、慌てて香織を追いかけて出ていく。

美奈子、桐島と目が合う。

○道

足早に歩いて行く香織。

後ろから追いかけるサツキ。

サツキ「あの！　すみません！」

香織、振り向いて

サツキ「あの、私……桐島先生の……」

香織「え、何？　もしかして……生徒？　高

校教師ってプロフィールに書いてあったし」

サツキ「梓さんのお友達……なんですよね？先生を……梓さんに会わせてあげてください」

香織「……なにそれ、まるで私が悪者みたいな言い方」

サツキ、真っ直ぐに香織を見つめる。

香織「なんであなたがそんなこと言うの？」

サツキ「……」

香織「……桐島くんのこと、好きなんだ？」

サツキ、小さく頷く。

サツキ「会わないと、先生、梓さんのこと忘れてくれそうにないから」

香織「会ったらもっと忘れられなくなるかもよ」

サツキ「……でも、このまま会わなかったら、私は先生の一番にはなれない」

香織、俯く。

香織「……そうだね……うん……」

○カフェ・店内

桐島と美奈子が向かい合わせで座っている。

美奈子、溶けたサツキのパフェを頬張っている。机には空になった美奈子のパフェ皿も。

桐島「あの……」

美奈子「桐島先生が羨ましいです。……ただ好きだからっていう理由だけで、側にいようと必死になってもらえて」

桐島「……」

○公園

ベンチに座っているサツキと香織。

香織「梓と桐島くんね、同じ大学行く約束してて さ。桐島くんは学年トップだったし、正直もうちょっといい大学目指してもいいと思ったけど……そこまでして梓の側にいたいんだなって」

サツキ、酔った桐島の写真を見ている。
香織「でも結局、彼だけ受験に失敗してね。その後からかな、急に桐島くんと連絡取れなくなったの……梓、なんともない感じにしてたけど、相当ショックだったみたい」
サツキ「……」
香織「自分と付き合ったせいで、桐島くんの人生台無しにしちゃったって……梓もさ、桐島くんが自分に合わせてくれてるのわかってたから」
サツキ、香織の悲しげな顔を見つめる。
香織「相手に似合うように頑張る恋愛は、息苦しいだけだよ……」

○カフェ・店内
美奈子「先生。梓さんとサツキは違いますよ」
桐島、黙ってコーヒーを飲んでいる。
美奈子「このままサツキの好意を無視するんですか」
桐島「そもそも、生徒と教師、何かあっては

いけないんですよ」

美奈子「そういうことじゃなくて……」

桐島「……東城さんも一時の気の迷いでしょう。女子生徒にありがちな年上男性に憧れるみたいな」

美奈子「サツキはそんなんじゃない！　そんなんじゃ……」

美奈子、俯いて泣くのを堪える。

桐島「……恋愛なんて、ろくなもんじゃないですよ」

桐島も俯く。

桐島「恋愛なんて、自分が自分でないみたいで気味が悪い。笑ったりはしゃいだり。余計なことで悩まされたり苦しくなって……心が乱される」

○桜ヶ丘女子学園・外階段（夜）

静まり返っている校舎。

桐島、疲れた様子でタバコを吸い始める。

校庭に目をやると、中央に人影が。

○同・校庭（夜）

地面に寝転んで目を閉じているサツキ。

急に顔に懐中電灯の光を当てられる。

サツキ「わ！」

懐中電灯で照らしているのは桐島。

桐島「何してるんですか！　こんな時間に危ないじゃないですか」

サツキ「先生かー」

と、笑い、深呼吸するサツキ。

サツキ「私の癒し時間なの」

桐島「癒し？」

サツキ「星、綺麗だよ。ほら」

桐島、少し迷うが、サツキの横に寝転ぶ。

桐島「ああ、本当だ……綺麗ですね」

サツキ「私だけの絶景スポット」

桐島「星なんて久々に見ました……」

サツキ「夜空を見上げられるのは心に余裕が

ある人だけなんだって。でもそれって逆だと思うんだよね。夜空を見上げることで、心に余裕が生まれるんじゃないのかな」

サツキの横顔を見つめる桐島。

サツキ、深呼吸をすると、

サツキ「あ、先生。またタバコ吸ってたでしょ？」

桐島「大人の癒しです」

サツキ「なんか、おっさんみたい！」

サツキが笑うと、つられて桐島も笑う。

サツキ「先生はさ、梓さんに会ったらどうするの？」

桐島「……わかりません。ただ……ただ、もう一度会いたいだけです」

サツキ「そっか……」

○アパート・香織の部屋

スマホを見つめる香織。

○百貨店・紳士服売り場

ネクタイを選ぶ桐島。

店員「ご自宅用ですか？」

桐島「あ、いや……」

考え込む桐島。

○居酒屋・入り口（夜）

遠野と桐島、入店。

桐島、辺りを見回してサツキの姿を探すがいない。

遠野「あれー、今日はサツキちゃんいないんだね」

桐島「……」

○同・テーブル席（夜）

食事する遠野と桐島。

遠野「なあ、まだ梓ちゃん探してんの？」

桐島「……」

ため息をつく遠野。

桐島、ビールを一気に飲み干す。

桐島「……梓と一緒にいて変わっていく自分

がさ、本当は怖かったんだよ。自分が自分じゃないみたいで気味が悪くて……僕らしくないなって」

遠野「やっぱお前、人間らしくなったな」

桐島「またそれ……」

遠野「いや、人の性格って、そう簡単に変わらないだろ？　だけどさ、お前がよく笑うようになったり、はしゃいだり、悩んだりしてるの見て、俺嬉しかったんだよね！　最高に楽しそうだなって！」

桐島「……お前は俺の母親かよ」

遠野「なんだよー！　俺今いいこと言ったのに！」

笑い合う二人。

○カフェ・店内

ブラックコーヒーを飲んでいる香織。

桐島、入店。香織のもとへ。

桐島「新月さん……」

香織「今日は桐島くんの奢りね？」

桐島「え？」

香織「あの子。サツキちゃんに頼まれたの。桐島くんがご飯奢るから、先生のこと許して、梓に会わせてあげてくださいって。でも奢ってもらえるだけで許すわけなくない？　アプリで今度こそ結婚相手見つけようと思ってやりとりしてた相手が桐島くんだなんて。詐欺だよ」

桐島「東城さん……」

香織「……でもあの子。いい子だね」

メニューを選んでいる香織。

桐島、数秒考えて、

桐島「この間、遠野に会ったんだ」

ピタリと香織の手が止まる。

香織「ふーん。何か言ってた？」

桐島「いや、なにも」

香織「ふーん……」

桐島「遠野さ、最近クロワッサンにハマってて」

香織「クロワッサン？」

桐島「駅前の小さい本屋の横に最近できたパン屋。そこのクロワッサンが死ぬほど美味しいんだって」

香織「……そう」

桐島「週2で通ってて……水曜と土曜。しかも朝イチで」

香織「水曜と土曜……」

香織、スケジュール手帳を確認する。

数秒考えて、

香織「私の友達がどら焼き好きで。焼きたてで食べられるところがあるんだって。焼きたてのどら焼きって何って感じだけど」

桐島「……美味しそう」

微笑む桐島を見て香織も微笑む。

○和菓子店・外

こじんまりとした年季が入った店構え。

入り口から行列ができている。

近くのベンチでその様子を見ているサツキと桐島。

サツキ「私……いて大丈夫？」

桐島「一緒にいてもらえると、助かります」

○同（夕）

辺りは街灯がつき始める。

店の看板が片付けられる。

サツキ「……明日から学校だね」

桐島「……課題、終わらせましたか？」

サツキ「あ！　やば……」

桐島、呆れてため息をつくが微笑みながら、

桐島「学校に帰りましょう。急いで終わらせますよ」

サツキ「えー？」

二人笑い合いながら歩きだす。

梓の声「流星くん……？」

その声に振り返ると、そこには一ノ瀬梓（28）が。

桐島「梓……？」

梓、サツキの姿を見ると足早にその場

から去る。

追いかけようとする桐島。

サツキ「先生！」

サツキ、桐島の手を引く。

桐島「……」

サツキの手を優しく離すと、梓を追いかけていく桐島。

桐島の背中を見つめ、涙を流すサツキ。

○桜ヶ丘女子学園・職員室

忙しなく仕事をしている教師たち。

○同・2年3組教室

夏休み明けの騒がしい教室。

美奈子のもとへ女子生徒2人が声をかけてくる。

生徒1「ねぇ、今日サツキ休み？」

美奈子「さあ。多分そうじゃないかな」

生徒1「あのさ……美奈子って……サツキと付き合ってるの？」

美奈子「え？」

生徒2「ほら、よく一緒にいるし、手繋いでたり……それに……この間見ちゃったんだよね。サツキと美奈子がキスしてるの。だから」

美奈子「ただの友達だよ。見間違えただけじゃない？」

生徒2「……そ、そうだよね！」

美奈子「いくら友達でもキスなんてしないし」

生徒1「そうだよね！　いや、なんかごめんね！」

笑い合う3人。

生徒2「でもさ、サツキって女子と付き合いたくて女子校入ってきたらしいじゃん？」

生徒1「え、そうなの？」

生徒2「なんか、噂で。ＬＧＢＴってやつ？」

生徒1「え、何それ……こわ」

生徒2「なんか……気まずいよね？」

苦笑いし合う2人。

美奈子「そんなわけないじゃん。そんな噂信

じてんの？」

廊下で聞いている桐島。

○東城家・サツキの部屋

布団にくるまっているサツキ。

ゴミ箱の中に、開封済みのギフト用包装紙とネクタイ。

○桜ヶ丘女子学園・理科室

授業を始めようとする桐島。

桐島、一つ空いた席を気にしている。

美奈子がそれを見つめている。

○同・理科準備室

桐島、デスクで資料をまとめている。

そこへ、美奈子が入室。

美奈子「失礼します」

桐島「ああ、水無月さん。どうしました？　質問ですか？」

美奈子「サツキを都合のいいように使わない

でくれます？」

手を止める桐島。

美奈子「元カノが見つかったらサツキは用済みですか？」

桐島「僕はただ彼女……東城さんと一緒に」

美奈子「先生。もう気付いてますよね？　サツキの心は、男です。サツキが男になりたいと思えば思うほど、先生の中途半端な気持ちが邪魔なんですよ。サツキが先生を好きでいることは、いわゆるゲイとかBLだってことですよ？　……それでも先生はサツキの隣にいられますか？　覚悟がないなら、サツキに変な期待持たせないでください」

桐島「……」

○同・外階段（夜）

桐島、タバコを吸おうとする。

が、やめてポケットにしまい、夜空を見上げる。

○東城家・サツキの部屋（夜）

東城紀美佳（４４）、ゴミ箱からネクタイを拾う。

タオルで髪を拭きながらサツキが来る。

紀美佳「サツキ……これ」

サツキ、紀美佳からネクタイを奪い取る。

紀美佳「サツキ……あなたの気持ちは否定しないわ。だけど、今は我慢して学校のルールを……」

サツキ「ルールって何？　自分の性別偽ってでも守るルールって、そんなに大事なものなの？」

紀美佳「ううん、違うわ。サツキはサツキらしくいるべきよ。でも、これはサツキのためを思って言っているの。学校で一人だけ違う格好してたら、友達からいじめられたりするかもしれないでしょ？　……そうしたらこの先社会に出たときも」

サツキ「お母さんは全然わかってない！」

驚く紀美佳。

サツキ「お母さん、変わったよね……よそよそしくしちゃってさ。なんか他人と暮らしてるみたい。特別扱いとか気持ち悪いんだけど。私は、ただ……普通に生きたいだけなのに……みんなそうやって。本当気持ち悪い……」

部屋を飛び出すサツキ。

○公園（夜）

美奈子、走ってきてあたりを見回す。

ベンチで縮こまっているサツキ。

美奈子「サツキ……」

サツキ「なんか……人生うまくいかないねー」

無理やり笑顔で話すサツキに美奈子は何も言えない。

サツキ「ねぇ、美奈子。なんで私、男じゃないんだろうね……ただ普通に、社会に男だって認められたいだけなのに」

徐々にヒステリックになっていくサツキ。

サツキ「こんな体も、声も……腫れ物みたいに見るあの目も、全部全部全部最悪！！」

息が荒くなるサツキ。

サツキ「でも、一番気持ち悪いのは私だよね……」

美奈子「他の人なんてどうでもいいじゃん」

美奈子を見つめるサツキ。

美奈子「周りの人なんてどうでもいい、クラスの子とか親とか先生とかどうでもいい！　私だけ見てよ！　私だけでいいじゃん！」

サツキ「美奈子……」

美奈子「私はサツキが好き……」

サツキ「え？」

美奈子「どう？　気持ち悪い？　普通じゃない？　それなら今すぐサツキが男になってよ！　そうすれば私だって……！」

サツキ「美奈子！　……ごめん」

互いに息が上がっている。

美奈子「……サツキ。大好き。どこが好きなのかも分からないくらい、サツキが好き」

サツキ、何も答えられない。

美奈子「それでも、私は先生に敵わない？」

サツキ「先生が梓さんを忘れられなくてもいい……先生が好き……」

美奈子「そっか……サツキの幸せは私の幸せだから。サツキには幸せになってもらわなきゃ困る」

サツキ「美奈子……」

美奈子「……っていう私のワガママ、聞いてもらえないかな？」

サツキ、必死に首を横に振り、美奈子を抱きしめる。

サツキ「美奈子……ありがとう」

涙を流して微笑む美奈子。

○カフェ・店内

向かい合わせで梓と桐島が座っている。

梓、机の下で左手薬指の指輪を外す。

梓「なんか、こういうの……久しぶりだね」

桐島「うん……」

数秒の沈黙。二人同時にカップに口をつける。

梓「元気に……してた？」

桐島「うん。……梓も元気そうで……よかった」

梓「うん……」

二人、また同時にカップを口にすると、目が合う。

思わず笑う梓。つられて桐島も笑う。

桐島「……ごめん。今更だと思うけど、ごめん」

梓「……心配だった。ずっと」

桐島「うん……」

梓「それだけ」

桐島「……うん」

また二人同時にカップを口にする。

○教室（梓の回想）

日誌を書いている梓（１７）。その向かいで本を読んでいる桐島（１７）。

梓「桐島くんはさ、なんで私のこと好きなの？」

桐島「……なんで？」

梓「あ、いや。ほら、桐島くんって女の子に興味なさそうだから、なんで私を好きになってくれたのかなって……」

桐島「……特にない」

梓「え？」

桐島「可愛いから好き、優しいから好き、気が合うから好き。一般的にはそういうことなのかもしれないけど、それって好きな人を好きな理由っていうより、ただの要素に過ぎないっていうか……本質的な理由じゃない気がする」

梓「うん……？」

桐島「女だから好きとか、男だから好きじゃないとか、そんなこと思わないでしょ」

梓「うん」

桐島「……気づいたら目で追ってた。気づいたら頭から離れなかった。気づいたら……僕のことを好きになってほしいって思ってた」

桐島、梓を見つめて、

桐島「僕は、梓っていう人間に惹かれたから一緒にいるんだよ」

微笑む桐島。

○カフェ・店内

桐島、外の天気を気にしている。

雲行きが怪しい。

梓、小さくため息をつく。

梓「でも、よかった」

桐島「え？」

梓「もういつまでも私が心配しなくて大丈夫だなって安心した。あの子といる時の流星くん、私が見たことない顔だった。だから……よかった」

笑顔で言う梓。

桐島、一瞬驚くが、照れ臭そうに微笑んで、

桐島「うん」

桐島、カップを一口飲んで、

桐島「梓。ありがとう。梓のおかげで、すごく楽しかった。一緒にいて、楽しかった」

梓「……うん」

梓、机の下で左薬指に指輪をつけ直す。

○桜ヶ丘女子学園・校庭（夜）

激しく雨が降っている。

サツキ、制服姿（リボンあり）で地面に寝転がっている。

そこへ、桐島が走ってきてサツキに傘をさす。

桐島「今日は星、見えませんけど」

サツキ「……」

桐島「夏休みの課題、提出してないの東城さんだけですよ。明日も休まれたら、僕が困ります」

サツキ「先生が手伝ってくれなかったから終わってない」

桐島「……じゃあ、明日一緒にやりましょう。だから、ほら」

桐島、サツキに手を差し伸べる。

サツキ「あーあ、どうしよ。制服汚れちゃったな。ねえ、先生……これでも着なきゃダメ？」

涙が溢れるサツキ。

サツキ「先生……私、気持ち悪いかもしれないけど……私、女の子じゃなくて……でも、先生のこと……先生と……」

必死に言葉を振り絞ろうとするサツキ。

桐島、サツキを力強く抱き寄せる。

桐島「本当に君は……僕を困らせる天才ですね。課題忘れるわ、大人をからかうわ、人の過去の恋愛に首突っ込むわ……もう東城さんのせいで頭の中が忙しいです」

桐島、サツキの格好をまじまじ見て、

桐島「なんですか？　その格好。東城さんら

しくない」

サツキのリボンを外す桐島。

桐島「僕はこっちの方が好きですよ」

二人、目を合わせて微笑む。

○東城家・キッチン

紀美佳、お弁当の準備をしている。

手提げ袋にプリンを入れる。

○同・サツキの部屋

クローゼットの前で驚いた表情のサツキ。

ハンガーに綺麗にアイロンがけされた制服と捨てたはずのネクタイがセットでかかっている。

○同・キッチン

紀美佳、洗い物をしている。

サツキが2階から降りてくる足音。

サツキの声「行ってきます！」

紀美佳「あ、お弁当ちゃんと持っていってね！」
サツキの声「はーい！」
紀美佳「いってらっしゃい！」
サツキ、外出していく。
紀美佳、嬉しそうに微笑む。

○桜ヶ丘女子学園・校門前
不格好に結ばれたネクタイを身につけ、
サツキ、登校。
その姿を見てギョッとする清水。

○同・2年3組教室
サツキ、入室。
生徒たち、サツキの姿を見て驚き、ヒソヒソと話している。
サツキ、生徒たちと目が合うと笑って、
サツキ「おはよ！　どう？似合うっしょ！」
美奈子、サツキを見つめて微笑む。
サツキ、美奈子と目が合うと、満面の笑み。

○同・職員室

清原、イライラしながら入ってくる。

清原「なんですかあれ！　女子校にネクタイなんてして来ちゃって！　うちの伝統が」

桐島「清原先生」

清原「あんな男みたいな格好！　ご近所から何を言われるか！　退学よ、退学！　大体あなたがきちんと指導しないから」

桐島「先生。どのような姿を選んでも、東城さんは東城さんです。私たちの生徒に変わりありません。一人の人間として意思を尊重し、自立した大人へと導くことが、私たちの重要な役目じゃないでしょうか」

清原「……それもそうですけど、でも」

桐島「それに……伝統あるうちみたいな学校から退学者を出したら、それこそご近所に何言われるかわからないですよ。今の時代、SNSの評判も怖いですから」

清原、何も言えない。

桐島「東城さんについては改めて私からきちんと、適切な指導をしておきますので」

清原「……お願いしますよ」

○同・理科準備室

男性のように脚を開いて座っているサツキ。

桐島、実験道具を磨いている。

サツキ「梓さん、結婚するんだ？」

桐島「ええ」

サツキ「ショック？」

桐島「いいえ」

サツキ「……ねぇ、先生。似合ってる？」

自分のネクタイ姿を見せつけるサツキ。

桐島「似合ってないですね」

サツキ「え？」

桐島、サツキに近づく。

サツキのネクタイを結び直しながら、

桐島「身に付けるなら、きちんと、ですよ」

悪戯な笑みを浮かべる桐島に見惚れる

サツキ。

桐島「でもこれ、スーツ用ですよね？」

サツキ「え？」

桐島「学生用のネクタイにしてはちょっと幅が太すぎるかと……」

サツキ「……うるさい！」

二人、笑い合う。

○桜ヶ丘女子学園・教室（夕）

美奈子、帰る準備をしている。

そこへ女子生徒2人が話しかける。

女子生徒1「ねえ、美奈子。私たちこれから駅前のカフェ行くんだけど、美奈子も……どう？」

美奈子「期間限定のパフェ。奢ってくれるなら行ってあげてもいいけど？」

女子生徒1「何それ！　うざー！」

3人、思わず笑い合う。

そのまま騒ぎながらカフェへと向かう。

○パン屋・イートインスペース

席につき、嬉しそうにクロワッサンを頬張る遠野。

香織の声「クロワッサンって食べづらいよね」

香織、遠野の向かいに座る。

遠野「香織……」

香織、クロワッサンを頬張る。

お互いの汚れた口元を見て、思わず笑う遠野と香織。

嬉しそうにクロワッサンを頬張り続ける。

○桜ヶ丘（女子）学園・校門前

桜が満開に咲き誇っている。

入り口には「女子」の部分が二重線で消された「第75回桜ヶ丘学園卒業式」の看板。

○同・理科準備室

桐島、散らかった机の上を片付け、ゴ

ミ袋に捨てていく。
引き出しを引くと、例の手紙が。
その手紙をゴミ袋に捨てる。
手紙には告白の文章とともに「一緒に楽しい思い出を作りたい」と書いてある。

○同・校門前

桜を眺めている桐島。
サツキの声「先生！」
少し低い声に呼ばれて振り返る桐島。
スーツとネクタイ姿で男性の装いをしたサツキ（18）が手を振る。
ネクタイはヘタクソに結ばれている。
サツキ「ね、どう？」
桐島「酷いもんですね……」
サツキのネクタイをほどき、手際良く結び直していく。
サツキ「ねぇ、先生。僕、何回練習しても上手く結べなくてさ……」

サツキ、桐島の手に自分の手を重ねて、

サツキ「僕一人じゃスーツ着られないんだけど。これからどうしよう？」

桐島、一瞬驚くが、微笑んでサツキのネクタイをキュッと締める。

桐島「練習、必要ですか？」

サツキの頭を撫で、校舎に向かっていく。

サツキ、満面の笑みで後を追いかけて、桐島の背中に抱きつく。

はしゃぐ二人。

桜の花びらが舞っている。

ー終ー